母子相互行為の中で形成される幼児の食事のスクリプト(2)

吉澤千夏[1]・加須屋裕子[2]・上村佳世子[2]
([1]上越教育大学学校教育研究科・[2]文京学院大学人間学部)

目的

本研究は、母子のままごと遊び場面及び家族での日常的な食事場面の観察を通して、幼児のスクリプトの形成とその要因を明らかにすることを目的としている。

これまでの研究において、上村等（2012）は 18，21，24 ヶ月時の幼児のままごと遊びと食事場面における食事のスクリプトを分析し、母親の主導性はままごと遊び場面よりも実際の食事場面において高く、危険回避に関わるルールやしつけの慣習に縛られた相互行為が進行されることを明らかにしている。また、食事場面で獲得されたスクリプトはままごと遊び場面においても表出されること、現実の食事場面での食事行為や発話はままごと遊び場面において再現され、さらに現実場面における母子の役割をそれぞれ交代しながらままごと遊びが展開されることが示されている。これらのことから、ままごと遊びにおける経験は、子どもにとって現実の食事行為や食事におけるルールの意味を理解する機会として重要な意味を持つことが考えられる。

そこで本報告では、1 歳時から 2 歳時までの幼児とその母親のままごと遊びの縦断観察データの分析を通して、幼児のスクリプトの形成過程とそれに関わる母親の役割について、母親のかかわりを中心に事例を踏まえて検討する。

方法

対 象 者：観察開始時に 12 ヶ月齢の子どもとその母親 6 組

観察期間：対象児が 1 歳の誕生日を迎えたときから、2 歳の誕生日を迎えるまで、3 ヶ月おきに計 5 回の観察を行った。

手　　続：対象児の 1 歳の誕生日の前後 1 週間の間に家庭訪問をし、ままごとセット（テーブル、食器棚、まな板、包丁、鍋 2 種、フライパン、ポット、お玉、しゃもじ、ガスコンロ、レンジ、皿 2 種、カップ、湯呑み、茶わん、フォーク、スプーン）を用いて、母子に自由に遊んでもらう。その様子を録画し、分析に用いる。また、母親に対しては、家族構成及び各自の年齢、日常的な食事時の様子や食に対する好みや考えなど、対象児と家族の食に関わるインタビューを行う。さらに、同時期に家族の日常的な食事場面の撮影も依頼している。

本報告においては、12、15、18、21、24 ヶ月時の幼児とその母親のままごと遊びの縦断観察を通して、幼児のスクリプトの形成過程とそれに対する母親の関わりについて分析を行う。具体的には、母子それぞれによって表出される、「切る」「盛り付け」「食べる」「おいしいという」等の発話や行為の表出の様相について、その縦断的変化を比較するとともに、母子間でのやりとりについて、特に子どもに対する母親の発話・行為に注目し、その縦断的変化を検討する。

結果および考察

ままごと遊び場面における母子の相互行為を分析した結果、以下のことが示された。(1) 12 ヶ月時において幼児から表出される行為は「食べる」「飲む」が中心であり、発話によるスクリプトの表出はほぼ認められない。その後、調理や供応に関する行為が表出されるようになり、さらに母親からの発話に対して応答する等、幼児の発話がままごと遊びにみられるようになる。(2) 母親は、12 ヶ月時の幼児の行為を模倣するとともに、「もぐもぐもぐー」「ごくごくー」等の発話を添える等、幼児から表出される行為を強化するような発話・行為が多くみられる。さらに、幼児の発達に伴い、調理や供応に関する行為が幼児から表出されるようになると、母親は「グツグツしてるの？」「何食べてるの？」と幼児の行為を確認したり、「おいしいね」と幼児の行為を意味づける発話がみられるようになる。また、「食べる」「飲む」に対しても、単に飲食するにとどまる時期から、その飲食物が誰のものか、どこに食器・食具を置くのか等、より社会的で文化的な発話を幼児に対して行うようになっている。

母親は幼児の発達に伴い、行為そのものの強化から社会・文化的な教示へとかかわりを変化させることが示唆される。